

# 証言

## 大熊町の記憶

# 3.11

2011.3.11 ■ Interview

### ■ Interview 原発事故の現場から

証言  
01



野馬形地区住民

土屋繁男さん

震災当時は東京電力福島第一原子力発電所（以下、福島第一原発）内の警備会社に勤務していました。震災直後から、敷地内の事務所で情報収集などをしていましたが、日が落ちると構内は停電で真っ暗。午後9時ごろ、唯一灯りが点いていた免震重要棟に入ると、すぐ「外出禁止」と言われました。すでに原子炉は危ない状況だったのです。防護服もマスクも作業員以外の余分がないということでした。

免震棟は関連会社の社員などで廊下まで人があふれていました。私は円卓のあった対策室入り口あたりの廊下に座り、原子炉の状況や、避難指示が拡大していく様子を見聞きしていました。意外とみんな冷静でしたが、12日午後突然「ドーン」ときた。下から突き上げられて直下型の地震かと思いました。民放テレビで爆発の様子が映し出されて、「ああ、1号機爆発したんだ」と。奈落の底に突き落とされた気持ちがしました。それからは1号機の状況を見ながら、2～4号機の圧力や温度も検討しなくちゃならない。人数的に1～4号機すべて並行して対応できないのか、危険な方から対処する感じで慌ただしくなりました。

14日に3号機が爆発した後、東京電力株式会社（以

下、東京電力）の吉田昌郎所長（当時）が小部屋でじっと横になっているのを見ました。あまり寝ていないのだろうし、疲れたんだろうと思いました。「おれもここで命を落とすかもしれない」と感じました。その後、午後7時ごろだったか、吉田所長が廊下に出てきて「今までのいろいろ対策をとってきたけれども、これ以上良い方向には向かない。皆さん、出られるならば自分の車等で避難してください」と言いました。「防護服などは用意できませんが、今、入り口のドアを開けさせます」と。私は、警備会社の十数名と分乗する打ち合わせをして、ドアが開くとすぐに事務所に走り、自分の車に乗りました。妻と再会したのは田村市の総合体育館。その時、「5年10年は帰れねえから覚悟しろ」と言ったのを覚えています。

事故で手のひらを返したように東京電力のみを責める気持ちにはなりません。35歳で東京からUターンしてきた時、帰る要因の1つになったのは原発です。仕事がなければ戻ることはありませんでした。今まで我が町を含め周辺の町や住民は利益を受けてきたし、関東地方の住民は電力を享受してきたはず。間違いを正すことは必要ですが、事態を収束するために努力している時に頭から「反対」というのはおかしいと思うし、どこかで「妥協」も必要だと思います。

今、町は大川原地区に復興拠点を置くといっています。「誰もそんな所に行かないよ」と言う人もいるかもしれない。でも、町民が戻る場所を作るために一生懸命にやってくれています。拠点を廃炉作業に従事する人たちの受け皿にしつつ、そこに元の住民も関わっていったら少しづつ新しい町をつくるしかないと思います。

### ■ Interview 自衛隊員として、任務への覚悟

証言 02

陸上自衛隊員（郡山駐屯地）

※当時、2人とも陸上自衛隊郡山駐屯地の部隊に所属。平成23年3月11日夜～12日未明、自衛隊のどの部隊よりも早く福島第一原発に入った。現場の情報収集や放射線防護の対策がままならない状況下での派遣任務に応えた。



第6特科連隊第2大隊本部管理中隊  
（郡山駐屯地）

橋本吉和さん

橋本：震災発生時、第6特科連隊の指揮所で勤務していました。3月11日の夕方、福島第一原発が災害派遣の中でも特に重要視されているという情報が入りました。何が必要かという原子炉を冷却するための電源と水。駐屯地から消防車（ポンプ車）と電源車を派遣することになりました。私は電源の担当として11日午後11時ごろ、パトカーに先導されて福島第一原発に向かいました。当時、自衛官として特殊武器防護に関する放射線の知識はあったものの、原発や原子炉に関する知識は必要以上のものはなく、急を要することから防護服を着用する時間さえありませんでした。現場の情報で「冷却用の水が無くなっているのだから給水しなければならない」と伝えられました。福島第一原発の免震棟に案内され、郡山駐屯地の指揮所と連絡が取れるよう電話があった入り口近くに自衛隊として陣を構えました。

菊地：私は消防車の方です。こちらは一度福島市に向かい、福島駐屯地の消防車と合流して計3台10人で原発に向かいました。我々が到着したのは12日早朝。町内を車で移動中、町の人たちが私たちに手を振ってくれ、農作業をしているおばあちゃんを見かけました。福島第一原発の免震棟に着くと、東京電力から「すぐに操作してくれ」と誘導されました。図面を広げ、原発施設内のどのポンプが使用できるのか。どのように消防車に繋いで給水するかなどを話し合っ現場に向かいましたが、ポンプが潰れて使えなかったり、がれきの山が邪魔をしてホー

スが届かなかったりしました。懸命な作業でようやくホースを繋いでも、がれきの上での長時間の放水作業はホースを痛めてしまう。そのようなやりとりを繰り返して、ようやく確保した注水ルートを消防車が交代で出動しました。一度の出動は大体1時間～1時間20分くらいでした。

橋本：電源車の有効な活用方法についての検討が続き、その間、私は消防担当の隊員のサポートと郡山指揮所との連絡を担いました。現場に向かう隊員は東京電力から防護服やマスク、線量計が渡されました。防護服やマスクを着用しての任務は息苦しさや暑さで過酷でした。

菊地：私は消防車の統括でしたが、状況が明確に見えない中での作業であり、成果が出ているのかどうかも具体的に確認できない。そのような中でただひたすら行動していた隊員たちはしんどかったと思います。それは東京電力も同じで、図面上、構造がこうだからこのやり方でいいはずだ、と。放射線という通常ない環境下で表情は硬いのですが、弱音や不満をいう隊員はいませんでした。橋本：東京電力の方たちの「俺たちが何とかするんだ」という意気込みをすごく感じていました。すぐにこの人たちは信頼できると思いました。関連企業の人も本当は避難すべきなのに、現場に残り、円陣を組んでかけ声を出しては現場に向かっていた。

菊地：そういう方たちが現場から戻るとソファのところで横になっている。少し会話すると「俺たちはもう先が



第6特科連隊第1大隊  
第2中隊（郡山駐屯地）

菊地和彦さん



長い身じゃない。これからの人たちのために頑張れば良い」と言っていました。その言葉で体にも心にも負担が大きい現場なのだとは再確認しました。12日午後1号機が爆発したときは自衛隊の消防車が現場に向かうところでした。免震棟から出たのを見届けたところで「ドン！」という音と縦揺れがあって、窓の外を見ると何かがパラパラと舞っていた。消防車は一度引き返してきましたが、任務が優先のため、また出勤しました。現場の長として、今いる隊員たちに何をしてくれるのかとずっと思って活動していました。

橋本：爆発のときは正直、もう帰れないと覚悟しました。助かって、ここを出られたとしても入院生活になるのではないかと思っていました。ただ、どんな状況でも自分たちは留まって任務を遂行するしかない。12日夜、自衛隊の化学専門部隊と交代するため原発を出て、田村市船引に入って民家の灯りを見た時はホッとしました。私は

船引出身なんです。発災後の電話の不通から妻には連絡が取れなくて、知らせないままの任務でした。戻って電話がつながったら、まず「まさか原発行ってないよね」と聞いてきたので「行って来た」と答えたら怒られました。その後も次の任務に就いたので、実際に再会したのは6日経ってからでした。

菊地：私は一応、向かう前に「行ってくる」とメールしました。届いてはいたようですが、震災1週間ほど経って、親族の葬儀のために帰宅した時に「ちゃんと言ってくれ」と怒られました。自衛官は任務が優先であり、命令であれば行くのは当然です。

今振り返ると「歴史に残る現場でお父ちゃん、やってきたぞ」という気持ちがわいてきます。

自衛官として、初動でまず現場に行き任務を遂行できたというのは私の誇りになっています。

## Interview 家族が一緒にいた場所に

証言 03



熊川地区住民

木村紀夫さん

震災の津波で父王太郎（当時77歳）と妻深雪（同37歳）、次女汐風（同7歳）を亡くしました。

地震発生時は仕事で富岡町にいて、上司が津波の高さ3mというラジオ情報を聞きました。それで「うちは大丈夫」と判断してしまっただけで、2時間ほど働き、熊川の自宅に戻ると家はもうありませんでした。避難所だった町の総合体育館で母と長女と再会し、初めて3人がいないと聞きました。それでも津波で流されたとは思いませんでした。自宅から50mも歩けば高台です。きっと別の避難所にいるか、けがをして病院にいるのだろうと探し回りましたが見つからない。自宅に戻りましたが、暗闇の中がれきが散乱し、ほとんど探すことはできませんでした。

避難指示は翌12日の午前7時ごろ、当時の区長から聞きました。「生きている者の方が大事だぞ」と言われた記憶があります。その言葉でまず守るべきは長女だと気持ちが切り替わりました。すでに近所の人と町を出ていた母と長女を追って川内村へ。さらに原発事故を受け、いわき市の警察署に3人の行方不明の届けを出した上で、岡山県の妻の実家に向かいました。16日早朝に着き、長

女を預け、その日の昼には単身、福島に戻りました。3人が生きていたら、大熊に残っているとは思えない、どこかに避難しているはずだと、県内や隣県の避難所を回りました。

父は4月末に自宅前の田んぼの真ん中で発見され、妻は6月に、いわき市の夏井川河口付近で見つかった遺体とDNAが一致しました。実は妻と判明した遺体の情報を、僕は前に警察署で確認していました。そこには「身長145cm」とありました。妻は158cm。情報には「足先が脱落」と書いてあったのに、僕は気づいてやれませんでした。それでも、よく見つかったとホッとしました。

汐風は平成28年12月に熊川で遺骨の一部が見つかりました。同じがれきの山からは震災の翌年、汐風の靴が見つかっていました。汐風はずっと「こっちこっち」と手を振っていたのではないかと感じています。父と汐風は震災直後に捜索できていれば見つかった可能性が高いと思う。6年です。原発に対する考えは人それぞれだと思いますが、この月日を思うと、僕は原発を肯定することは絶対にできません。

いつかまた熊川地区に帰りたいです。それは大熊だからというより、家族が一緒にいた場所だから。自宅裏には汐風のための地蔵を建てました。先日行ったら、どなたかやってくれたのかマフラーが巻かれてありました。お供えをしてくれる方もいます。誰もいない町なので、少しでも人が来てくれたら汐風も寂しくないと思う。訪れてくれる方がいることをありがたいと思っています。

## Interview 変わる生活と、父の思い

証言 04



夫沢1区住民

佐久間國幸さん

うちは父國丸が始めた梨農家で、私は定年まで役場に勤めながら兼業で梨園を営み、震災時は嘱託職員でした。その嘱託も3月で終わり、いよいよ本格的に妻と梨園をやろうとしていた矢先の震災でした。

当時は、父と妻、長男と4人暮らし。父はたまたま震災前日に、目の病気で福島市内に入院しており、当時結婚して隣町にいた長女と近所の人を含め7人で、11夜のうちに乗用車で西へ向かいました。印鑑と通帳、キャッシュカードは持って、でもあくまで「万が一」の避難。すぐに戻るつもりだったから家に鍵もかけませんでした。

福島市もライフラインが断絶し、父は会津若松市に転院。新潟市に避難した私たちが会いに行ったのは10日ほど経ったころだと思います。入院生活は約4か月に及びました。ちょうど病院は建築工事中で、足場が生まれ、日中もカーテンを引いているから暗かった。父にとって生まれて初めての入院でしたし、今まで梨畑一筋で働いていた父にはしんどかったと思います。父は精神的に落ち込んでいくように見えました。そういうこともあり、退院前の検査で腹部にソフトボール大の静脈瘤が見つかった。

## Interview 私のできることをする

証言 05



野上1区住民

市川スミさん

震災当時は町内で営んでいた飲食店にいました。ドドンと突き上げるような揺れで、テレビは飛ぶように落ち、冷蔵庫は倒れ、食器は雪崩のように床に散乱。余震は何度も続き、そのたびに電気のカサなどが落ちました。自宅に戻り、その日は停電のために趣味の釣りのランブ

でも、父は退院を希望しました。静脈瘤が破裂するとは限らないし、血管も弱っていたので手術のリスクもある。「もう運を天に任せる」と父は言いました。

新潟に来るように勧めましたが、父は知人の多い会津若松市に残ることを選びました。同市に避難した町役場で働き始めた長男が父と仮設住宅に入り、面倒を見てくれました。仮設住宅で倒れた父を看取ったのも長男です。

震災翌年の正月は、新潟市で家族一緒に過ごしました。その後、父は妻に電話で「おめえらには世話になった。すごく感謝してる。ありがとう」と伝えたそうです。感謝の言葉なんて初めてでした。父はその約1か月後、1月29日に亡くなりました。83歳でした。

「おれは仮設では死なない。早く家を探せ」と言っていました。事情を分かっていたのでしょうか。「戻りたい」とは言わなかった。一度、家の状況を見せてあげたかったけど、震災の年の一時帰宅は体力的に難しかったのです。悔やまれますが、あの荒れた状態を見なくてよかったのかもしれないとも思います。

大熊の自宅は中間貯蔵施設建設予定地にあります。もう戻れないと割り切っているいわき市にうちを建てたつもりですが、切ない。経済的にある程度満たされたとしても、あの土地で生活していた日々への思いは消えないです。「国破れて山河あり」と言いますが、戦争でも山河は残る。原発は山河すらなくす。我々のふるさは全部なくなります。

父の骨は母が眠る大熊の墓に入れましたが、いわき市に改葬予定です。新しい墓には父が丹精込めて育てていた梨のオブジェを添えるつもりです。

で一晚を過ごしました。翌朝、町内に住む息子からの電話で避難を知り、近所の高齢者を車に乗せて集会所へ向かいましたがバスはすでに出発した後で、私たちは消防団員の「田村市都路へ」という言葉で国道288号を西へ向かいました。道中は避難の車がアリの行列のよう。都路地区の避難所はすでに満杯でさらに走り続けるしかなく、途中で見かけた町のスクールバスの後をついていく形で田村市総合体育館に入りました。原発の爆発は体育館のテレビで知りました。みんな「もう家には戻れない」「これからどうしよう」と口々に話し、泣いている人もいました。

避難から数日後、体育館では役場職員が避難所運営のボランティアを募り、私も参加することにしました。体



調不良の方がいないか館内で声かけしていると、お年寄りが一人、急に倒れてそのまま亡くなってしまったということがあります、声かけの大切さが身にしみました。最初は「大丈夫ですか？」と聞いていましたが、うつ病を患っている方の家族から「大丈夫という言葉はやめて」と言われ、「具合が悪い方はいませんか」という言い方に変わりました。言葉の重みに気づかされました。

声かけのもう一つの目的は、調理を手伝ってくれる人を探すことでした。体育館には米や野菜などの支援物資が届いており、私は飲食業だったこともあり、知り合いの主婦などを見つけ、数人で炊き出しを始めました。外のテント内にガスコンロを設置してもらい、1日交代で温かい味噌汁ご飯を提供しました。ボランティアの女性たちがリズム良く野菜を刻むまな板の音が、私には音楽のように聞こえたのを覚えています。ただ、何百人分もの食材を刻むこの音が避難生活のせわしなさを表して

いるように感じた人もいたようです。

4月に入り、町が拠点を移した会津若松市へ私も自分の車で向かいました。「なんで自分の家があるのに、こんな遠くに行かなきゃいけないの」。そう思った途端、涙がこみ上げてきました。「絶対に帰ってやる」「神様も仏様もないのか」。涙声で叫びながら運転しました。直後、体育館の事務員さんから「戻って」と頼まれ、翌日には田村市に戻り、避難所運営を引き続き手伝うことになりました。今はいわき市の仮設住宅で自治会長を引き受けて暮らしています。最近は入居者も減りましたが、自立していくのだから寂しくも喜ばしいことと思っています。私はいわき市で仮設の皆さんが自立するのを見送りながら、大熊町に復興公営住宅ができる日を待ちたいと思います。これまで支援をいただいた全国の方々に感謝しつつ、春は梅や桜、夏はあじさい、秋には紅葉が輝く町をもう一度取り戻すために頑張りたいと思います。

## ■ Interview “伝える”こと



証言 06 大野2区住民 田澤憲郎さん

昭和40年に大熊町役場に入庁し、震災の4年前に定年退職しました。福島第一原発の着工は昭和42年。原発誘致前は、「やませ」という浜風の影響で米があまり取れず、出稼ぎが多かった。それが福島第一原発が来ると、雇用の場ができ、飲食店、下宿も増えた。協力企業も来るから財政的にも良い。自分も誘致時から原子力行政に関わり、県原子力広報協会の理事も務めました。

震災当日は停電で津波のことも福島第一原発の状況も分からず、翌12日朝に地区の班長から避難を聞きました。その時も「なんで全町避難なんだべ」と思っていました。それまで大熊は原発という世界の最先端技術に関わっている所だと自負し、安全神話につかっていた。避難は地震警戒のためと勘違いし、「2、3日で帰れる」と思っていました。

その日から小野町、飯館村の親類宅、そして栃木県鹿沼市へと移りました。大熊からはバスで避難したので車がない、すぐ帰るつもりで着の身着のままだから金もない。町は会津若松市に移ると聞きましたが、行きたくても行けないのです。4月20日、町が警戒区域になって入れな

くなる前に、車だけでも持ち出そうと友人に連れられて町に立ち入りました。自宅と家族がやっていた理髪店には泥棒が入られていましたが、車は無事。車を得て二次避難先として喜多方市の旅館に移動しました。

その旅館で、海外からの客に震災体験を話すように頼まれたのをきっかけに、語り部を始めました。それまで「大熊にいた」「原子力広報協会にいた」と言う「原発やってたべ」と言われそうで、自分のことを話すのを避けていました。でも「やっぱり伝えないといけない」と思いました。最初は自分の体験を話していましたが、次第に減災を重視するようになりました。まずは自分の命を大事にすること。また、高齢者には「お薬手帳を大事にしろ」と伝えています。避難中、何の薬を飲んでたか分からなくても、手帳さえあれば薬を出してもらえたからです。東日本大震災と原発事故の悲劇を風化させることなく、後世に伝えていかなければならないと強く感じています。

今、心配しているのは仮設住宅に残っている高齢者です。震災後は支援をいただくことが多く人を頼ることに慣れてしまいがちですが、仮設の見回りをしながら「早く自立しねえとダメだ」と話しています。貧しかった町がこの40年で地方交付税の不交付団体になりました。我々は東京電力と共存共栄でやってきたのです。そして今、事故があってもやはり多くの人々が廃炉に向けて頑張っています。おれらの仲間、町民がです。それを見て、我々もそれぞれに前を向いて生きていかなきゃなんねえべと思うのです。

## ■ Interview 少しでも大熊の近くに



証言 07 大野1区住民 坂上節子さん

震災があった3月11日は自宅の庭で、自動車の暖房をつけて一晩過ごしました。翌朝、地区の集会所に行ったら、50〜60人が集まっていて避難だと言われました。それまで原発のことは考えていませんでした。自宅内は地震で家財が散乱していたので、とにかく夫の持病の薬と下着2、3枚、床に散らばっていた飴や果物を鞆に詰めました。町を出るバスの中ではみんな「どうせ2、3日。明日には帰って来れるんじゃないか」と話していました。まるで近所の人たちと旅行に行くようで、悲壮感はありませんでした。

田村市総合体育館に入りましたが、東京にいた長男が迎えに来てくれて16日に避難所を出ました。夫の薬は持って出たのですが、私の薬は家財の下敷きで持ち出せず、体調が優れず、結果、精神的にも参ってしまいました。体育館には他県から来てくれた医師もいましたが、病名や飲んでた薬がわからないと処方できないということで、睡眠剤を1錠もらっただけでした。

体育館を出る時、役場職員に渡された紙に名前と退出口を記すよう言われました。でも、どこに向かうかを記

す欄がありませんでした。職員もきっと忙しい中、慌てて作った用紙だったのでしょう。私は小さい紙切れの隅に、長男の住所と電話番号を書き残してきました。「町には私たちがどこにいるか知っていてほしい」と、何か必死な思いでした。避難所を離れてもやっぱり頼りは町なんです。町にはその後もよく電話しました。パニックを起こしていたようなもので、相手をする職員は大変だったろうと思います。何かを要望するというより、不安でいっぱい「これからどうなるの」って詰め寄っていました。今、振り返ると「自分のことしか考えてなかったなあ」と思います。

長男宅から横浜の市営住宅に移った後、夫は転んで足を痛め、入院と通院を余儀なくされました。でも、やっぱり少しでも大熊の近くに帰りたくて、平成27年3月にいわき市の復興住宅に移りました。周りの入居者はほとんどなじみのない人たちだったけど、やっぱり同じ大熊ということで、仲良くなるのも早いです。今（平成28年12月現在）は、夫の足を手術するためにまた一時的に横浜市に戻りましたが、来月にはまたいわきに戻ります。待ち遠しくて、今年と来年1月のカレンダーを2つ壁にかけて、「あと何日」と毎日指折り数えています。復興住宅の皆さんは、戻るのを待っていてくれるはずですから。

この6年、避難先を転々とし数奇な運命だと我ながら思いますが、私たちよりももっとひどい移動や避難の経験をした人もたくさんいる。ふるさとを追われて、戻れない生活が当たり前になっているのが、なんだか変な、寂しい気がします。

## ■ Interview 避難の大変さと、大熊への想い



証言 08 下野上1区住民 武内都さん

震災の夜は車の中で過ごしていました。車内のテレビで「原発の3km圏内の人は念のため避難して下さい」と呼びかけていたことを覚えています。うちは6kmほど離れており、このときは自分も避難することになるとは思いませんでした。

翌朝、「集会所に集まるように」という防災無線で集会所に向かうと、ガラスが割れて入れず、みんな外に集まっていた。そこでバスでの全町避難を聞き、自宅にいた同居の父母に伝えると、父は「おら行かね」と。父は足が悪いんです。確かにバスには乗れないと思っていた所、介護タクシーを運営している人が声をかけてくれて、もう一組のご夫婦と一緒に両親は先に町を出ました。午前10時ごろだったと思います。

私と夫、三女、孫は集会所に戻りましたが、待てど暮らせど迎えのバスが来ない。通り過ぎるバスはどれもほぼ満杯で、みんなでそれを止めてはお年寄りや子どもを優先して乗せました。昼を回ってもバスは来ず、午後2時ごろだったか、自衛隊のトラックがやってきました。荷



台には両脇に長椅子があり 20 人ほどが乗りました。10 台ほどで約 200 人の町民がトラックで移動したと思います。荷台は幌があるといても隙間風が入ってきてとても寒かった。毛布を持参した方がいて、みんなで体を寄せて毛布を膝にかけさせてもらいました。車が止まるたび幌を開けて外を見ましたが、じきに暗くなりどこを走っているのかも分からなくなりました。どの避難所もいっばいで、走っても走っても受け入れてくれるところがないわけです。そのときは何より、先に避難した両親のことが心配でした。

郡山市の温浴施設に着いたのは日付が変わるころ。ホッといたら、放射線の検査をしないと入れないと言われました。市内の別の場所で検査し、やっと施設に入ってテレビを見たら原発から煙が上がっている。夫は嘔然としてテレビの前から動きませんでした。

## ■ Interview 将来への不安、決意の転身



証言  
09

熊 1 区住民  
北原秀規さん

大熊町から約 1,400 km 離れた福島県筑後市でイチゴを生産しています。この土地で、もう 6 年目を迎えますが、今でもあの日の大地震と体育館での避難生活を忘れることはありません。

震災当時、私は原発を補修する会社に勤務しており、福島第一原発 4 号機の地下で同僚 5 人と定期点検中でした。地震の直後に警報が鳴り、地下は停電で真っ暗になりました。懐中電灯の明かりを頼りに地上に出ました。津波も心配しましたが海に変わった様子はなく、まさか直後に 10 m を超える巨大津波が押し寄せるとは思ってもみませんでした。会社の帰宅指示で、両親と妻、生後 2 か月の次女を含む 3 人の子供が待つ自宅に戻りました。

翌 12 日、全町避難で私たちは三春町の岩江中学校体育館に落ち着きました。みんなが着の身着のまま食べ物にも不自由していた時、近所の農家の方が米や野菜を差し入れてくれました。何もできない自分に比べ、命を支える農家は強いなあと思いました。おぼろげながら農家として別の人生を送る自分の姿が頭に浮かびました。

数日後、妻子を東京の弟のところに避難させ、私は残って町消防団員としての任務に当たりました。任務が一段落して東京で妻子と合流した後、義姉の実家がある福岡

介護タクシー運営の知人と連絡がとれたので、翌 13 日にはその人に迎えに来てもらって両親のいる避難所に移りました。しかしそこも 14 日には閉鎖されるということで別の避難所へ。両親の体調を考慮し、17 日には長女が暮らす栃木県へ移りました。長女宅で徐々に入浴した時、「みんな無事でここまで来れた」と思い、涙が止まりませんでした。母は離れていた時間がとても長く感じたようで、最近まで「3 日も迎えに来ないんだもの」と言っていました。よほど不安だったのでしょう。

栃木では周囲の方によくしてもらい、現在は鹿沼市に家を構えてこちらの暮らしに少しずつなじんできているところです。一方で、大熊町とのつながりも大切にしていきたいと思っています。去年は相馬流山踊りに参加しました。車を運転して通えるうちは町の催しや集会などにも喜んで参加したいと思っています。

県筑後市へ車で向かいました。到着後、同僚たちが会社の要請を受けて次々と福島第一原発に戻っていると聞き、悩みました。そして震災から約 1 か月後、私は再び大熊町に戻り、福島第一原発の復旧作業に当たりました。防護服姿の作業員たちが建屋を歩く現場で、私自身も死を覚悟しました。

7 月、将来への不安を抱えたまま、3 か月ぶりに福岡に戻るようになりました。所属していた社内のラグビーチームからは寄せ書き入りのボールをもらいました。「前へ!」「家族、自分自身を大切に活躍ください」という激励を読み、福島を離れて筑後市で新たな人生を歩む決断をしました。子どもたちに帰るふるさとをつくらなければならぬという思いもありました。

見知らぬ土地で私は農業を志しました。筑後平野の中央に位置する筑後市は米、お茶、ブドウ、梨の栽培が盛んな田園都市です。緊急雇用創出事業を活用してイチゴの一大ブランド「博多あまおう」の生産農家で働き、福岡県の就農者研修生として基礎も学びました。経験なし、農地なし、農機具なしで出発しましたが、離農するイチゴ農家から農地や施設、機材等を借り受けることができ、地域の方々や行政、JA の方たちもさまざまな面で支援してくれました。家族全員で協力し、最近ようやく軌道に乗ってきたと実感しています。

いつまでも被災者でいられない、ふるさとのため何かしたいと思い、町の子どもたちに収穫したイチゴを贈りました。また、JA 青年部の仲間たちとともに、会津若松市の小学校にイチゴを使ったアイスクャンディーを届けました。ゼロから始めた農業で、まだまだ苦労は多いですが、その時に見た子どもたちの笑顔には勇気をもらいました。

## ■ Interview もう一度行きたい大熊の海



証言  
10

下野上 3 区住民  
小椋真理子さん

平成 26 年 4 月に会津若松市に「ワンズホーム」というカフェを開きました。店名は日本語に直訳すると「ふるさと」。大熊は、学校帰りに近所の家に「おばちゃん、帰って来たよ」と寄り添うような町でした。ふるさとのように誰もが安心して来られる、帰って来たような気持ちになる場所になればいいと思って名付けました。

震災時は町で飲食店を開こうと、資金を貯めていたところでした。避難所などを転々としたが、福島第一原発の状況を心配した両親に県外に出よう勧められ、知人を頼って関西方面に向かいました。震災から 3~4 週間が経つところです。福島では、水は買えない、ガソリンスタンドも開いていない。雨さえ怖かった。そんな所にいたのに、関西の空港に降り立った瞬間、空気が違うんです。まるで何事もなかったよう。何一つ不自由のない生活圏にいる自分に強い違和感を覚えました。福島に帰りたい、でも帰る家がない。その後、山形を経て、平成 25 年秋に会津若松の借り上げ住宅に入った両親の元に戻りました。

ただ会津に戻ると、大熊町民とは口に出しづらい雰囲気を感じました。何かあると両親と「大熊だったら……」

と言っていました。大熊の生活が 100 点だった訳ではありません。でもただ堂々と当たり前に日々を過ごせた場所。初めて失ったものの大きさに気づきました。

気持ちが変わるきっかけは開店でした。震災後初めて自分の居場所ができたと感じ、すごくうれしかった。店に来てくれる会津の方たちにも「私は大熊の人間です」と心を開いたら、受け入れてくれました。会津の人も大熊町民のことが気になっているんです。だから質問されたらなんでも答えることにしています。「大熊のイメージが良くなった」と言ってくれる人もいます。なんだか勝手に「避難」「受け入れ」と対抗する存在のように位置づけられていたけれど、基本は人と人。それまでも本当は、私の気持ち一つで状況は違ったのだらうと思います。

震災でふるさとを失いましたし、岩手にいた叔父は津波に流されました。でも、私よりも父は兄である叔父との関係は深かったし、何十年も過ぎて家も建てた大熊に対する愛着も深いはず。周りを見ても家族や大切な人を亡くした知人がいます。「私よりもっと悲しい思いをしている人がいる」と思っています。それに、ずっと福島に帰りたいと思って暮らしていたけれど、どこにいても一緒にお酒を飲んでくれる人がいました。震災がなければ得られなかった縁のすべてに感謝しています。

私はもう、大熊に戻りたいとは思っていません。それでも町が大切な場所であることには変わりない。もう一度、行きたい場所と言えば海です。素足で歩けば砂利が痛くて、すぐゴミを踏んでしまう。決してきれいな観光地ではないけれど、あの大熊の海がずっと私にとっての海です。

## ■ Interview 周囲の支えと夢の実現



証言  
11

夫沢 3 区住民  
熊野由紀さん  
(旧姓小川さん)

震災時はいわき市の磐城桜が丘高等学校 2 年生で、その日は列車が不通となって学校に泊まりました。妹も一緒だったのでしっかりしなければと思ったのですが、家族の安否も分からず不安でいっぱいでした。翌 12 日の昼ご

ろ、母から一言「生きてるよ」とメールが入り、その日のうちに母と弟が車で迎えに来てくれました。単身赴任先から南相馬まで駆けつけてくれていた父も合流し、家族 6 人そのまま東京都内の祖父母の家へ。その後、原発関係の仕事をしている父は、すぐに福島第一原発に向かいました。東京駅で母と 2 人、涙ぐんで見送ったのを覚えています。父は言葉が少ない人ですが、出発前に手を差し出され、握手しました。何かを伝えたかったのだらうと思います。

3 月中に家族で埼玉県内に家を借り、転入できる学校を探しました。転入先の高校はすごく親身になってくれて、制服や体操服など、卒業生に声をかけてくれたのか、



すべて他の生徒と同じ物をそろえていただき、始業式を迎えられました。避難してきたことは隠すつもりはなかったのですが、言わなくともみんな知っていたように思います。でも、それを揶揄する人は誰一人いなかった。福島から友人から「いじめられてない？」と聞かれて初めて「そんなこともあるんだ」と気づいたくらい。それでもやっぱり新しい学校で孤独感を感じて、震災のショックもあったのか、5月は学校を休みがちになりました。そんな状況でも学校に行けば、みんな仲間外れにすることなく声をかけてくれて、6、7月には学校に行きたいと思えるようになりました。

6月、最初の一時立ち入りで町に帰った時も、学校は「社会的学習の一環」として公休扱いにしてくれました。それまで、県外にはなかなか町の情報が届かず、インターネットの真偽不明の書き込みをひたすら見ながら、やはり町の状況を自分の目で確かめたいと思っていま

た。放射線についても1年間の追加被ばく放射線量とか一時立ち入りの滞在時間ならどのくらい浴びるかとか、自分なりに調べ、「これなら大丈夫」と立ち入りを決めました。実際に見た町は映画の世界のようで、悲しくて、町が本当に死んじゃったという感じがしました。

高校の卒業式では、私のために磐城桜が丘高等学校の校歌を歌ってくれたんです。クラスメイトの提案に話をしたこともない他のクラスの生徒たちも賛同して、いわきから校歌のテープを取り寄せて練習してくれました。うれしかったです。感動しました。

今は夢だった看護師として働いています。平成28年に結婚し、名字が小川から代わり、大熊の「熊」が名前に入りました。住民票も移し、もう一時立ち入りも誰かと一緒にできないけれど、いつか夫にもふるさつを見せたいなと思います。荒れているかもしれないけど、私のふるさつは大熊町なのです。

大熊町に暮らしたのは中学1年まででしたが、たくさん思い出があり、今でも大好きです。将来、何らかの形

で町に関わり、貢献したいと思っています。

### ■ Interview 前に進む、復興のために



小入野地区住民  
根本充春さん

震災当時から小入野地区の区長をしていました。地区は一部が海に面しています。津波を考え、車で海側の民家を回るために向かう途中、ふと見ると沢沿いの田んぼにすでに津波が上がってきているのが見えました。呆然です。すぐに逃げて、波が引くと住民たちに地区の公民館に避難するよう促しました。その夜のうちに町の指示で公民館から大熊中学校に移動することになりました。原発のことは頭をよぎったけれど「津波さえ収まれば戻れる」とその時は思っていました。「一晩くらい我慢しよう」と。中学校の体育館にはテレビはなく、車のラジオを聞いていました。津波の情報はありましたが、福島第一原発の情報は少なかつたと思います。

翌日、全町避難となり地区のすべての住人をバスで送り出した後、役場に行って避難する町民の誘導などを手伝いました。強調したいのは「あの時、大熊の町民はパニックにならなかった」ということです。まずはお年寄り子どもを優先。そう決めて、町民はそれに従い整然と避難をした。騒ぎもなく全員がバスに乗れたのです。

小入野地区は今、全域が中間貯蔵施設の建設予定地になっています。平成23年のうちに国から施設建設の話が

出た時、住民たちは反対しました。そのころには住民たちは一時帰宅で町に入り、自宅周辺の放射線量の高さを確認するなどして、それぞれ「すぐに帰れる場所ではない」と分かっていたと思います。でも、だからと言って施設を受け入れるかという、すぐに気持ちは切り替わらない。仕方がないと踏ん切りがつくまでに私もほかの住民も2、3年はかかった気がします。最終的には、同様に施設建設予定地に含まれる8地区の区長が協議し、町長に受け入れの判断を要請しました。受け入れられるか受け入れられないか決まらなると住民はいつまでも前に進めない。とにかく白黒はっきりしてくれよ、という気持ちでした。住民の中には「反対だ」という人もいるかもしれませんが、でも、大多数は「もう決めてくれ」と考えていると区長として肌で感じていました。

私が中間貯蔵施設を受け入れたのは大熊町の復興のためです。復興のために私たちはふるさをなくします。自分が生まれ育ち、住んでいた場所が一切全部なくなって、そこに立ち入りもできなくなる。その一方で、復興拠点のある大川原地区では除染がされ、昨年には特例宿泊も認められました。これは言葉では言い表せない。だって我々には除染も宿泊も今後絶対にあり得ないから。置いて行かれるというか一步一步、町が遠ざかっていくような気持ちです。

せめて町には今、まだ町並みが残っているうちに中間貯蔵施設の建設予定地を撮影しておいてほしいと求めています。記憶の中にしか存在しなくなるふるさを、せめて記録に残してほしいのです。

### ■ Interview あきらめ、矛盾、交錯する思い



夫沢3区住民  
富田英市さん

自宅は大熊町の夫沢3区にあり、区長をしています。行政区98世帯のうち25世帯ほどが中間貯蔵施設の建設予定地に含まれます。私の自宅は予定地外です。境界からは200mほどしか離れていません。

震災後2、3年ほどは、町に戻りたいという気持ちで8割以上ありました。契約する、しないの自由はあるとはいえ、中間貯蔵施設の予定地内の人たちは土地家屋を失うわけだから気の毒だと思っていました。でも、6年

### ■ Interview 震災を経験したからこそ、交流と経験



熊2区住民  
池田慧生さん

震災当時は中学1年生で、3月11日は先輩方の卒業式の後、友だちの家で遊んでいました。地震にひどく動揺しましたが、ちょうど友人宅に大人がおらず、母がいた私の家に友だち4人で走って向かいました。

翌日、私は母の運転する車で西に避難しました。はじめに着いた田村市常葉町の体育館は満員で入れず、次に向かった船引小学校で受け入れられました。その時、町で深刻なことが起こっているとは思ってもみませんでした。テレビで福島第一原発の爆発を知っても、すぐには帰れないと思いましたが、ここまでの長期避難など先のことはあまり考えていなかったと思います。船引小学校では風呂に入れなかったり寝にくかったりそれなりに不便でしたが、それほど辛いとは思いませんでした。それよりもボランティアの方が作ってくれた焼きそばが久しぶりの温かい食事ととてもおいしく、しかも「中学生ならお腹空いているだろう」とおかわりをもらったことがうれしかった記憶として残っています。

その後、同じ船引のデンソー工場に数日いてから、親戚のいる埼玉県に向かいました。途中、栃木県内のガソ

リンスタンドで、福島から避難してきたことを知った店員の方に「裏からまわっておいで」と言われ、本来提供していないガソリンを入れてもらいました。その心遣いには感動しました。

埼玉に避難中、大熊中学校が会津若松市で再開することを知りました。もともと埼玉の中学校に通うつもりがなかったので、早めに再開してもらえてよかったと思いました。再開直後は教科書がなくてプリントを使った授業でした。教科書が届き、本格的に授業を再開できたのは2週間ほど後だったと思います。最初は勉強よりも友だちに会うために通っているようなものでした。一度は離れ離れになったけれど、みんな変わっていません。うれしかったです。見ず知らずの土地で、学校が一番落ち着いていられる場所だったかもしれません。

そんな大熊中学校も卒業の時を迎えました。震災前なら進路が異なっても町から通う子がほとんどでしたが、避難生活では会津に残る人、浜通りに戻る人、県外に出る人とさまざまです。バラバラになる前に一生忘れない思い出をつくりたくて、歌手のA Iさんに手紙を出して卒業式で歌を歌ってくれるようお願いしました。A Iさんは本当に来てくれて素敵な歌声を聞かせてくれました。本当に一生忘れられない思い出ができました。

子どものころから地震研究者になるのが夢で、福島高専に進学しました。現在は地盤について学ぶ研究室に所属しています。震災は私の人生にとって悪い影響ばかりではありませんでした。むしろ、いろいろな人との交流や多彩な経験をするなどプラスになることが多くありました。



近く経過した今も私たちの行政区は放射線量が高いまま下がらない。家屋や周辺が荒れ果てていくと、段々に一時立ち入りしてもよその屋敷に入ったようで、懐かしいという思いも薄れてしまいました。今はもう帰ることは出来ないと思っています。中間貯蔵施設とは言わなくても、行政区全体を借り上げるなりしてほしいというのが正直な気持ちです。

2年ほど前にいわき市に家を構えましたが、復興拠点の大川原地区に戻れるようになったらまた町内で暮らしたいという気持ちはあります。一方で、大川原の様子を見ると、廃炉関係の会社の活動が目立ち、「これは元の大熊の雰囲気ではない」という感じもする。複雑な所です。せめて墓はふるさとに残しておきたいので、自宅近くの共同墓地から大川原に移す予定でいます。今はお墓参りするたびに防護服を着てマスクをして、とてもやりきれない思いがするからです。

自宅に帰ることはあきらめ、手放したいと思いつつも、まるっきり大熊とのつながりを失いたくない。中間貯蔵施設の予定地の人たちは自分の先祖から受け継

いできた土地家屋がなくなってしまうわけだから、それは自分のルーツが途切れてしまうようなものではないかと、やはり気の毒に思う気持ちもあるのです。矛盾していると言われればその通りです。自分の代で手放すのはご先祖様に申し訳ないという気持ちと、でもこれは震災と原発事故によってこうなったんだから仕方ないというあきらめと、いろんな思いが交錯している状態です。

今年に1度は区の総会を開き、去年は50世帯70人ほどが集まりました。予定地内の人も外の人も来ますが、わかまりなく、むしろ互いを心配しています。それぞれに気の毒だと。なんだか今までより仲良くなった気がするくらいです。私も中間貯蔵のことは全体の問題として考えてほしいと言ってきました。行政区は家族のようなものですから。

今の生活に不自由はありませんが、震災前のような心境ではありません。夜間に起きると眠れなくなります。意識している以上に町に未練があるのかもしれない。大熊は町として残って欲しいと思います。自宅を諦めた今、町が「私が大熊の人間であった」という証なのです。

ありません。世界一の町をつくれるのがこの町のおもしろさですし、さまざまな課題も新しいことに挑戦するからこそその難しさだと考えています。

役場職員となり4年が経ちますが、今、大熊町役場で私が働いているのは、世界に例のない震災と原発事故を

経験しながらここまで町をつないでくださったたくさんの方々のおかげだと思っています。これからも家族を含め、周囲の方々への感謝を忘れずに業務に励んでいきたいと思っています。

### ■ Interview 自分の力を被災地のために



東北復興に自分の知識が役立てばと、復興庁が募集していた被災地への司法書士派遣に手を挙げ、平成26年11月に大熊町の応援職員となりました。平成28年4月からは町職員となり、いわき出張所復興事業課に勤務しています。

宮城県生まれの横浜育ちで、子どもの頃から長期休暇のたびに仙台市の祖母のところを訪れていました。それだけに、東日本大震災は私にとってもショッキングな出来事でした。しかし、前年の11月に司法書士の試験に合格したばかりで、震災当時は新人研修中でした。被災地でのボランティア活動などには参加できず、その後、司法書士事務所勤務を経て独立しました。司法書士としての人生を歩み始めた慌ただしい時期でした。でもいつかは被災地のために、そんな思いが心のどこかにあったのかもしれない。

派遣が決まるまで大熊町のことをほとんど何も知りませんでした。ただ、自分が受け持つだろう業務内容は、事前に想像していたものと大きな違いはありませんでした。復興に必要な用地の登記簿を法務局で取得し、地権者を調べ、ご存命かどうか確認し、相続が発生している場合

は戸籍謄本等で相続関係を確定させるというものです。相続登記をしていなかったり、1つの土地を複数人が持ち合っていたりするなど困難なケースも多々あります。司法書士事務所実務経験を積んだ2年間は、一個人の相続について調査し、その相続登記をすることが仕事でしたが、大熊町では一事業に関わるすべての地権者を確定する必要があります。このため、司法書士事務所時代と比べて業務量は大きく増え、私自身の相続登記に関する経験値も相当上がりました。

復興庁との契約は最長3年間で、私も3年で横浜に戻るつもりでした。しかし大熊町に勤務して半年ほど過ぎた時、この町で最も司法書士が必要とされる時期は、私の任期終了後に訪れることに気付きました。国からの応援職員では制約が多く、町職員と同等の働きができない難点も気掛かりでした。そこで、職員として司法書士の役割を担いたいと考え、復興庁の応援職員を1年前倒して終了し、町職員になるという選択をしました。

遠い将来のことまでは考えていませんが、司法書士としてお役に立てることがある限りは職員を続けたいと考えています。福島第一原発の廃炉作業が進み、あの場所が更地になってから始まる仕事もあるでしょう。大熊町はかつて、原発の誘致により町を発展させてきました。しかし今、町はその原発のため苦境に立たされています。「ゼロ」からの出発ではなく「マイナス」からの出発にならざるをえません。そうした現状に目を伏せることなく、前を向いて町の発展の一翼を担えるよう尽力し、日々研さんしていきたいと思っています。

### ■ Interview 震災を経て、町の職員に



大熊町役場には平成25年度に入庁しました。まず福祉課に配属され、いわき出張所を経て平成28年度から健康介護課で勤務しています。

震災当時は新潟県内の大学2年生で化学システム工学を専攻していました。大熊町にいた両親の安否を確認し、少し安心しましたが、生まれ育った町が被災したことはとても信じられませんでした。その後、原発事故で全町避難になったと知りましたが、幼い頃から原発は安全なものだと教えられてきたため、水素爆発の映像を見ましたが避難がこれほど長期化する事態は想像できませんでした。

避難生活を送る両親のことは心配でしたが、当時の自分が避難先に駆けつけても迷惑になるのは理解していましたし、自分にできることは限られていると感じていました。震災前から卒業後は福島に戻るつもりでいましたが、この震災を経て、福島で仕事がしたい、また復興に携わる仕事をしたいと強く思うようになりました。その思いを

実現するために、大学で学んだことを活かせるような県内の企業に就職し、外側から復興に携わるかと悩みました。企業に入るなら大学院へ進学し専門知識を深めるつもりでしたが、町が大変な状況に置かれている今だからこそ、何かできることがあるのではないかと、また家族の近くにいるべきなのではないかと役場への入庁を決めました。震災を一つのきっかけとして役場職員になることを望み、かなえることができましたが、入庁してみると制度一つとっても初めて知ることばかりで、毎日仕事を覚えることに必死でした。自分は町の役に立っているのかと考えることもありました。しかし、一つ一つ仕事を覚えていく中で、復興を目指す町の仕事というのは決して派手なものではなく、行政機関として町を維持するための業務、避難先での町民の生活を支えるための行政サービスなど、震災がなくても当然必要とされる業務の積み重ねであるということを学びました。

今、私は配属課の業務の他に、平成28年度から発足した若手職員を中心に町の復興を考えることを目的とした「ふるさと未来会議」に参加させていただいています。今後の町の復興については、放射線等さまざまな問題がありますが、この先の復興や町のあり方について考えられることは自分自身のモチベーションの向上につながっています。この現状から復活した町は世界中どこを探して